大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ベーメの人間観：その基礎的データとシェリング（二）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 正彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004581

ベーメの人間観 ― その基礎的データとシェリング（二）

福島正彦

四（承前）

前稿[1]において、我々が研究しなければならないのは、「あったがままのベーメ」、独自の宗教的専心をもった一七世紀の人間ベーメであって、今日の研究者の特定の好みによって、いわば〈現代風にされた〉変形せるベーメではない、というアレクサンドル・コイレの指摘[2]を念頭に置き、ベーメ自身の人間観研究のための基礎的データとして、「人間の根源状態」に関する資料を紙数の許す限り提示した。しかし、この限られたデータに目を通すだけでは、そこから一つのまとまったベーメの人間観を構成することは恐らく至難のわざであるだろう。「ベーメは人間に関するまとまった教説をどこにも展開しなかった」と言われている[3]。尤も、このコメントは、ベーメが『人間の三重の生について』（Vom dreifachen Leben des Menschen）という著作をあらわしていることを考えれば、必ずしも字義通りには受け入れがたい。このコメントをしている研究者自身が、「人間観一般 Anschauung vom Menschen überhaupt」を論じた一章を含む研究書の中で、ベーメの右の著書に触れており、「この書において、少なくとも意図からいって、人間が中心点をなしている」と述べているのである[4]。しかし、それにもかかわらず、ベーメの人間観に関する一つのまとまった体系的教説が、この著書において展開されている、とはやはり言うことができない。なぜなら、彼は、この書以外の中でも随所に自己の人間観について、その神観、自然観、無底説、自由論等との関連で、断片的にではあるが、かなり詳細に述べているからである。

我々はベーメの人間観について論述するためには、何らかの視点を定めて問題意識を明確にし、一定の方法に従って考察して行くこ

とを求められる。この視点が、我々の個人的な嗜好や独善的な見方によるものであってはならず、実証的な文献に基づくものでなければならないことは言うまでもない。筆者がここで採用する視点は、西洋思想史上すでに評価が定まっていて、この分野の研究者達により客観的に妥当だとして承認されているものである。それは、ベーメの神秘思想を高く評価し、ベーメは「人類の歴史における、とりわけドイツ精神史における一つの奇跡現象 eine Wundererscheinung in der Geschichte der Menschheit, und besonders in der Geschichte des deutschen Geistes」であると言わざるをえない[5]、と述べたシェリング（F.W.J.v.Schelling 1775-1854）の視点である。かつて拙著において既述したことであるが[6]、シェリングがベーメから重要な哲学的カテゴリーを借用したということは、シェリング研究者にほとんど一般的に認められている、と言われる[7]。とりわけシェリングは、宗教と哲学との古来の問題である悪の可能性の問いと取り組み、自由論の中心問題を考察するに際して、ベーメから問題提起と解答を継承した、と述べられている[8]。更に、シェリングの人間的自由論は、神と世界と人間の生成に関するベーメの見解に徹底的に依存している、とさえ記されている[9]。我々はここでシェリングの視点を用い、人間的自由論で示される彼の問題意識に従って、その論述を辿りつつ、同時にベーメ自身の人間観の一端を前稿で提示したデータを組み込むことによって明らかにして行く、という方法を取りたいと思う。

（以下の論述の中で、［　］内に漢数字によって、ないし漢数字とアラビア数字との組合わせによって、引用されているものは、前稿で整理した項目番号とその細分番号を示している。（　）内に書題の略号を添えてアラビア数字で記したものは、Will-Erich Peuckertの新編によるベーメ全集の頁数であり、書題の略号は、前稿と同様、この全集版で使われているものによっている。）

五

シェリングは、その『自由論』、詳しくは『人間的自由の本質とそれに連関する諸対象とに関する哲学的研究 Philosophische Untersuchung über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände』[10]の「前書き Vorbericht」において、哲学の「もろもろの中心点」として「意志の自由」「善と悪」「人格性」等々の問題を挙げている（S.226）。これらの問題は、いずれも人間の意志、その主体と行為とに関わる事柄である。従って、『自由論』の課題は、当然「人間的」自由の本質の探究となる。しかし、シェリングにとっては、人間的自由の

可能性の問いは、同時に「神」「自然」「創造」の問題と必然的に関わらざるをえないものであった。このことは『自由論』の長い表題を構成する後半部「これに連関する諸対象」が示すとおりであり、この「諸対象」として「神」「自然」等が考えられているからである。

ベーメにとっても、人間的自由の可能性は、「神」「自然」「創造」の問題と切り離しては考えられないものであった。前項の基礎的データによれば、「神は人間を…造った」［一－3］。「神は…神の像に似せて人間を創造した」［二－3（1）］。「…人間は地の種子から、集まって形体化された質料から、造られた」［三－1］。「（アダムとエヴァは）外的な自然の生命として秩序づけられ、動物的な肢体を持つものとなった」［三－3（19）］。キリスト教の信条がいまだ人々の心を強力に支配していた西洋一六世紀の最後の四半期から、新旧両教の相闘う三十年戦争（1618-48）の前夜と初期の時代に生きたベーメ（1575-1624）にとって、人間の問題を考察することは、「神による創造」との関連を離れてはありえないことであった。

「見よ、これがあなたを造り、その内であなたが生きている真の唯一の神である。あなたが深み、星、大地をよく見るならば、あなたはこの神を見るのであり、この神の内に生き、あなたも存在し、この神があなたをも支配しているのである。そしてこの神からあなたは自分の思念を持ち、この神に由来する被造物であり、この神の内に存するのである。さもなければ、あなたは虚無であるだろう。」［五－2］

人間が「神」によって造られ、「神」の内に生き、「神」によって支配されているというのであれば、一体、人間的自由の可能性はどうなるのか。この問いは、ベーメに対すると同様にシェリングに対しても向けられねばならない。シェリングは悪の成立根拠を追究し、これを単に「制限 Einschränkung」「欠乏 Mangel」「掠奪 Beraubung」などを蒙っている受動性(S.36)や、あるいは「傾向性 Neigung」「感覚的欲望 sinnliche Begierde」(S.39)などの中にではなく、人間の積極的な自由の内に見出す。欠如や不完全性に悪の根拠を見る当時の伝統的な見方から彼は「遥かに遠ざかっている」、と指摘されるとおり[11]、シェリングは悪の可能性の根拠を受動的なもの、不完全なもの、消極的なものの内にではなく、「自然が含む…最高の積極的なものの内に in dem höchsten Positiven …das, die Natur enthält」(S.261) 存する、というのである。悪をおこない得るのは、あらゆる被造物中の最完全者、すなわち自然のうちにあって、しかも自然を超えうる力をもつ人間のみであり、悪の可能性の根拠は善のそれと同様に人間的自由の内にある。この

人間的自由は、シェリングによれば、観念的側面と実在的側面をもち、前者は、カントが説く叡知的本体の自由、すなわち「自己自身の本質の諸法則に従ってのみ行動し、自己の内のまた外のどのような他のものによっても限定されないこと」(S.276)を意味しているが、後者は、自由の「実在的な生きた概念der reale und lebendige Begriff」であり、それは「善と悪との能力ein Vermögen des Guten und des Bösen」である、と規定されるのである(S.244)。

この二つの自由概念の内、ベーメの人間観との関連において重要なのは、自由の実在的概念であり、善のみでなく悪をもなしうる能力としての「生きた自由概念der lebendige Begriff der Freiheit」である。一六、一七世紀の、キリスト教信仰と神学が支配的であった宗教改革後間もないヨーロッパに生きたベーメにとって、人間を含めた被造物の全体すなわち自然が神によって造られたとするドグマは、いわば思想面における根源的所与であったが、一八世紀から一九世紀前半に活躍したシェリングの場合も、この点の思想的状況は変わらないのであり、従って右のように積極的に捉えられた悪と神との関わりについて、ベーメが発したのとまったく同じ問いが当然シェリングにも向けられねばならないのである。自然の中には悪しきものと善きもの、ベーメの用語で言えば「暴虐性Grimmigkeit」と「穏和性Sanftmut」とが存在する、さて、万物は神に由来するとするならば、悪、暴虐性もまた必然的に神に由来せねばならぬことになる(Aur. S.36)、「一体、神の中に 悪を造るような意志があるのか」(M.M. S.8)というものである。シェリングは、この問いに答えるために、ベーメと共通するものであるが、概念的には遥かに洗練された独自の神観を立てる。

六

シェリングはまず「実存する限りの存在者Wesen, sofern es existiert」としての「神Gott」と、「単に実存の根底である限りの存在者Wesen, sofern es bloß Grund von Existenz ist」としての「自然Natur」との両者を区別する(S.249)。この自然は、神以前に、また神の外に何ものも存在しないのであるから、「神の内なる自然Natur in Gott」(S.250)でなければならない。それは「神自身の内にあって神自身でないもの das, was in Gott selber nicht Er selbst ist」(S.251)であり、「神の実存の根底Grund seiner Existenz」(ibid.)であると共に、その内において万物が生成してくる万物の根底なのである。シェリングの考えでは、神といえども、現勢的に実存する限り、その根底、根拠、基底をもたねばならないが、しかし、それは神の内になければならないのであるから、神はその実存の根底を「神の内なる自然」においてもっ

ている。この自然は、キリスト教の伝統的神学において「無からの創造」と表現されている「無 Nichts」に対応するが、それを、単なる虚無として解釈するのでなく、神がそこにおいて実存的にはたらき、その場所に自らを顕示してくる根源的自然として捉えたものである。この自然が神の「根底 Grund」であるが、神以前に何ものも存在しないのであるから、神が自然の「先者 Prius」、根底の先者、なのである（S.250）。両者は相互に予想し合い、一方は他方なくしては存在しえず、しかも互いに働きにおいて独立しているのである。神と自然との関係は、決して因果的一義的に決定されていないし、継時的前後の規定も受けてはいない。「内」とか「先」とかいっても、空間的内外や時間的前後の観念形式によって捉えてはならない。万物が発生し来たる究極的源泉は一の「円環 Zirkel」を成し、ここにおいては「一者 das Eine を生むものが、それ自身また一者において生み出されるであろう das, wodurch das Eine erzeugt wird, selbst wieder von ihm gezeugt werde」(ibid.)ということも、何ら矛盾ではない。ここには始めも終わりもないのである。

このようにシェリングは、実存する限りにおける「イデアールなもの das Ideale」と、実存の根底としての「レアールなもの das Reale」との円環関係を説いている。このシェリングの記述のように高度に抽象化された形而上学的表現によるのではないが、内容的にはまったく同様の見解をベーメにおいても見出すことができる。まずベーメは神を「それが神と呼ばれ、神である限りの神 Gott, so viel Er Gott heisset und ist」[12]と、「闇にして光、愛にして怒り、火にして光 Finsterniß und Licht, Liebe und Zorn, Feuer und Licht」（WzC.B.IV S.98）としての神とを区別して考えている。前者は何らの悪しきものをも欲しない、そこにはただ「唯一の意志 ein einiger Wille」のみがあり、それは「永遠の愛 ewige Liebe」であり、「平等の欲求 Begierde der Gleichheit」、「力、美、徳 Kraft, Schöne und Tugend」にほかならないのである(ibid.S.102)。「神は、キリストの愛において、気高い名イェスにおいて、何らの悪をも欲するはずがない…、この名の中には怒りのまなざしはいささかもなく、神は最高の、且つ最深の愛にして誠実であり、大いなる名エホヴァにおける神性の最大の甘美さである」（ibid.S.8）。「神の中に火や苦さ、あるいは辛さが、いわんや空気や水あるいは土があるということはできない…また、神の中に死あるいは地獄の火、あるいは悲しみがあるということはできない」(Prin.S.10)と記している。前項の基礎的データによって、この神観を確認しておきたい。「神の内には、悪に向かう決意はない」「神は愛であり、愛すること以外のことは何もするはずがな

い。」それにもかかわらず、「永遠にして時間的な自然の内に」恐るべき「怒り」が存在するのである［二－4］。そこにおいて、万物が生成する自然は神に由来するのであるから、これらのものは「闇にして光、愛にして怒り、火にして光」としての神から生まれたといわねばならない。ベーメは、このような火炎、辛苦、闇、憤怒の源泉を、「神の愛の光以前の父なる神に属している永遠の紐帯das ewige Band, 永遠の自然eine ewige Natur」(Drf.Leb.S.5)とも名付ける。しかも、この自然が神の霊の中にあるのであって、その逆ではないというのである。

ベーメはここで、「神と呼ばれる限りの神」と「神の内なる永遠の自然」とを区別しているが、両者には時間的前後関係を認めない。神の霊はすべて「いわば一の円環の中でgleichwie in einem Zirkel」(Aur.S.179) 生まれるのであり、「いかなるものも最初のものではなく、何ものも最後のものではないes ist keiner der erste und auch keiner der letzte」、「最初のものが最後のものを生むと同様に、最後のものが最初のものを生むのである」(ibid. S.114)。これらすべては等しく永遠であって、始めも終わりももたない。「すべてのものは互いの中に一の霊のようにあり、いかなるものも他のものの外には存在しないalle sind in einander wie ein Geist, keiner ist außer dem anderen」(ibid.S.121)。これらのものは「相互内属in einander」であり、決して分離されることはできないのであるが、しかしそのはたらきにおいては区別され、独立しているのである。このように相互内属しつつ、しかもそのはたらきにおいて異なる二元性を現わす、というベーメの見解と関連するものを、前稿で提示したデータの内に求めるとするならば、「悪は神の怒りの中に、善は神の愛の中に、認められる」［三－4］を挙げることができる。ここで「神の怒りZorn des Gottes」と言われているものは、「神と呼ばれる限りの神」、シェリングによって「実存する限りの神」と言われるものの属性ではなく、「神の内なる永遠の自然」、シェリングのいう「神の実存の根底である限りの存在者＝Natur in Gott」のはたらきを指すことは、すでに明らかであろう。

怒り、憤怒、暴虐などの恐るべき積極的な悪は、ベーメにとってもシェリングにとっても「神の内なる自然」から生成してくる。ベーメの前稿データによれば、「…魂とからだは苦痛と悩みに充ちた闇の谷となり、…父なる神の怒りの特性［が現われて、これ］に従って魂ははたらき、外的なからだは、四大の中で、熱と冷、そしてまた星の諸力のあらゆる特性において、はたらき始め、めざめた各々の特性を圧縮して一つのものとなした。こうして、からだは粗野で堅く動物的となり、…妖怪にして怪物となった」［二－3］。

シェリングにとっても、悪への能力は「実存する限りの神」から発するのではない。「純なる善意とみなされる神 Gott, der als lautere Güte betrachtet wird」(S.246)から悪が生じるはずがない。悪の根拠は、暗い暴虐性をも内蔵する自然の内にある。人間を含めてあらゆる被造物は、直接「実存する限りの神」によって造られたのではなく、「神の内なる自然」から生まれてきたのである。生まれたる者として人間は、生成の上からは、徹底して自然に依存している。しかし、人間を含めてすべての有機的個体が、生成されたものとしては他の有機的個体によって生まれ、「生成からいえば dem Werden nach」依存的であるが、「存在からいえば dem Seyn nach」決して依存的ではなく独立しているように、人間も自然から生まれながら存在の上からは独立し、しかも他の有機的個体を超えて、善悪選択の自由意志を有しているのである。生成の「依存性 Abhängigkeit」は、存在の「自立性 Selbstständigkeit」を決して廃棄しないのである(S.238)。

七

ベーメにおいてもシェリングにおいても、神と自然との根源的二元性のありかたが問題となるが、両者に共通しているのは、この二元性は決して分離した二元性ではない、ということである。なぜなら、神はその実存の根底である自然と対立して、これを排斥することはありえない。そうすれば、神は自らの実存の根拠を喪失して自己自身を破壊しなければならなくなるだろう。シェリングによれば、神はどこまでも根底(自然)のはたらきを許すのであり、ここに「許容 Zulassung」概念の一つの意味が存するのである(S.267)。

神と自然は、この意味において「分離不可能 unabtrennlich」であるが、そのはたらきにおいて「区別され unterschieden」なければならない(S.250)。神と自然との根源的二元性は、対立性ではなく、非対立的な「分立 Disjunktion」(S.299)として、各自が各自だけで、「一者 das Eine」あるいは「元底 Urgrund」に述語されることは可能なのである。ベーメもこの分立に関して、まったく同様のことを次のように表現している。「いずれの源泉もまた各自の内に生み出すものの中心をもち、区別 Scheidung をもっているが、しかし互いに分離している abteilig auseinander のではない」(Princ. S.57)。「肯定性が否定性から分離され、かつ二つのものが並存するということはできない、それらはただ一つのもので、しかも二つの源泉(原理)へと分けられ、いずれもが自分自身の内ではたらき意志する二つの中心を形成するのである。丁度、昼が夜の内に、夜が昼の内にあって二つの中心であり、しかも分離されず―分けられているように」(Theos. Frag.S.7)。「二重の

唯一の力があり、二つの中心がある。しかしそれらは根源的には一性から、一つの根底から来る」(ibid.S.27)。

シェリングは、その根源的な二元性が述語され分立している一者あるいは元底を、ベーメの用語に従って、「無底 Ungrund」と呼ぶのである。[13]「無底」は、分立せる二元性の絶対的な「無差別 Indifferenz」である。それは、それ自身においては、何らの述語ももたず、もつのはただいわば「無述語性という述語 Prädikat der Prädikatlosigkeit」のみであり、しかもだからといって虚無でも怪物でもない(S.298)。ベーメ自身は「無底」について、次のように述べている。

「神(この引用文中で神といわれているのはすべて無底を指すと解することができる—筆者)は、これであるとかあれであるとか、悪であるとか善であるとか、自己自身の内に区別をもつとかいうことはできない、なぜなら神はそれ自身において自然からも感情からも、被造物からも自由であるから。神は何かあるものへの傾向をもっていない、なぜなら神の前には、神がそこへ傾くようなものは何もない、悪もなければ善も無い。神は自己自身の内にあって、自然と被造物に対する一つの意志もなく、一つの永遠の無なるものとして無底である。神の内にはいかなる苦悩もなく、神へまたは神により傾くような何ものかもない。神は唯一の存在であり、そこにおいて、あるいはその中で唯一の意志を創ったり捉えたりするようなものは、神の前にも神の後にも存在しない。神は彼を生んだり与えたりする何ものももたない。神は無にして全であり、そこにおいて世界と全被造物が横たわる唯一の意志であり、神の内にあってすべてのものが始まりなく、等しく永遠であり、等しい重さ、量、数の中にある。神は光でも闇でもなく、愛でも怒りでもなく、永遠の一者である。」(Gdw.S.4f.)

このようにベーメも「無底」の無述語性と絶対的無差別性を表明しているのであるが、[14]しかし、それはシェリングの場合と同様に、単なる虚無ではない。基礎的データ[二一—1]における「永遠の不動性」としての「無」ではない。「無底」としての「無」は、そこから「色、力、徳が生じる」(Sex puncta theosophica S.8f.)意志であり、「あるものへの欲 Sucht nach etwas」(Mysterium pansophicum S.97)であって、「あるものを渇望している」(M.M.S.12)、「物は、憧憬する意志から生まれた神的霊の輝きである」(Princ.S.66)とベーメは述べている。

ベーメのいう「無底」としての「無」の「あるものへの欲」、「永遠の一者」の「憧憬する意志」を、シェリングは、論理的に飛躍した、浪漫主義特有の詩的表現によって、おおよそ次のように展開する。「永遠の一者」は「自己自身を生まんとする—憧憬」

(Sehnsucht---sich selbst zu gebären) を感じている (S.250)。この憧憬は一者そのものではないが、一者と共に永遠であり、単に憧憬である限り悟性を含まぬ意志、予感する意志である。憧憬は悟性（光）を求め、神はこの求めに応答してロゴスを写像として発する。ロゴス、ことばは、神の内に生み出された神自身である。悟性の第一の作用は諸力の分解であり、この分解によって分かたれた諸力は、後にからだが形成される際の素材となる。こうして憧憬と結合したロゴスによって造られた被造物は二重の原理をもっている。第一の原理は被造物を神から分けるもの、かれらを根底に留まらしめようとする闇の原理であり、我意、自己執着である。第二の原理は、自然の内に現われた光、悟性であり、我意に対する普遍意志である。(S.251-255)

ベーメの人間観に関する基礎的データの中に、ベーメ特有の錬金術的用語（例えばチンクトゥール Tinctur: これは、元来チンキ剤を意味する錬金術用語であるが、ベーメの用法では不純物を浄化する生命のはたらきを指している、前稿註7による）は別として、シェリングが用いた右の語句に対応するものが随所に見られる。「不安は自らの内に第一の原理をもっている。そして不安の意志に対して第二の原理が救いのために来たる。第二の原理のみの内にあっては、神は善、愛、光および力である」[二－2]。「造られた像に神の全本質の似像に従って、神の息の吐出された全本質から神が吹き込んだ人間の命が、その内に存したのである」[二－3 (2)]。「人間のからだは地の精髄から成っている」「人間は永遠から神の知恵の中で、神の影像にして似像として見られていた」「従って、天と地が鏡に映るように、知恵の中で見られている」[二－4]。「楽園は呪いに至るまでは、大地を通して萌え出ていた。ところが悪魔の嫉妬が人間を欲深くした」「そこで彼は我性の中へ入っていった。そこでチンクトゥールとからだとの分解が続いた」[三－3]。「転落の際に---人間から奪われたものは、ただ神の光であって、この光を浴びて、人間は全き愛、謙譲、柔和および神聖性の内に、神にあって生き、活動し、存在し、こうして神の力とことばとを天の糧として食し、天使のように完全性の内に生きるはずであった」[二－3]。

八

「根源状態 Urstand」における人間像をベーメはどのように捉えていたか。それを示す基礎的データには、ユダヤ神秘思想カバラ (Kabbalah) やパラケルススの錬金術用語を取り入れた彼固有の神秘的見解が多く含まれている。例えば、前稿での最初の項目から抽出し、これを他の文献で補って箇条書きすれば、次のようになる

だろう。

a　根源状態における人間は、永遠から存在する神の似像である［一－1］。

b　神の似像は、神の知恵における「永遠の乙女」である［一－1］。

c　「永遠の乙女」は女ではなく、ましていわんや男ではなく、その両方であって、両性具有的存在である［一－1］。（これは、カバラが説く「アダム・カドモンAdam Kadmon、根源的人間」[15]に相当する。）

d　神の似像は世界創造前に、世界に先だって神の永遠の知恵の内にあった「人間のモデル」である［一－2（1）］。

e　「人間のモデル」は特殊な一定の場所を占める人間ではない［一－2（1）］

f　「人間のモデル」は、至る所に偏在していて、神の霊により見られ認識されたものである［一－2（3）］。（この人間は、パラケルススの用語を借りれば、「ミクロコスモス」であり、大なる世界全体マクロコスモスの性質を自らの内にもっているのである。Epist.S.86　参照）

g　神がこのモデルをどのように見ているかと言えば、ちょうど我々が自分の似像を鏡に映して見るように、神の知恵の鏡に映る自己の似像として人間という写像を神は永遠に見ているのである［一－3］。

以上、人間の根源状態を示す第一項目を取り上げて七点に整理したが、これからも分かるように、ベーメにはカバラの影響を受けた独特の神秘的人間観がある。しかし、本稿では、冒頭で記した通り、考察の方法としてシェリングの視点を用い、その人間的自由論に含まれる見解との共通性を明らかにしようと試みている。

シェリングと共通するベーメの人間観はどのようなものであるか。それは、シェリングの用語をまじえて言えば、根源的に「無底」によって成り立つ「神の内なる自然」から生成し、激動的な両極性、二重性をもっている。「魂の実体」は不可知であるが、そのはたらきは「不可思議な火」として激しく燃えているのであり（Sex Puncta Mystica S.83）この火炎は「光」と「闇」への二重の志向性をもっているのである。「人間の心は目に見えない火であり、この火は光と闇、歓喜と悲痛への傾向をもち、しかもそれ自身においては両者のいずれでもなく、ただそれへの原因であり、目に見えず把捉できぬ苦悩＝火であり、しかもそれ自身の本質からして、ただ生命の意志以外の何もののなかにも閉じ込められてはいない」[16]（M.M.Schiebler Bd.V.S.3）。このような両極的人間、「二重的人間」（Princ.S.5）について記している前稿基礎データを挙げれ

ば、次の第一一項目である。

「人間は、永遠にして時間的な存在者の決意により、語り且つ語り出されたことばにより、一つの像の中へ導き入れられた…。人間は外的なからだから言えば、四大よりなる本体であり、内的なからだから言えば、神の永遠のことば、すなわち神の本質的な力の最高の神秘による本体である。ところで内的な霊から言えば、人間は二つの特性の内にある。一つには、被造物的な魂が父の自然、すなわち光と闇の内なる神のことばの永遠の区分から成り、この特性は被造物的な魂の特性であって、永遠の意志の根底に由来するものである。他の特性は真の神的特性であり、光の力の内にある。この力は、その中にイエスの名が現われたキリストである…。」(Gdw.Bd.6. S.112)

人間の二重性を表わすために用いられる「光」と「闇」のシンボル言語は、ベーメに劣らずシェリングにとっても最も基本的な重要用語である。シェリングによれば、人間は被造物として「根底」(自然)から生まれ出てきたのであるから、神に対して独立である「闇」の原理を含んでいる。しかも、人間の内には、他の被造物と異なって、「闇」の原理の全力が存在し(S.255)、他の被造物を超える力を有している。このゆえに、人間は獣化よりも更に恐るべき退廃に至りうる(S.265)。しかし、その同一の人間の内に同時に「光」の全力も存在するのである。人間の内に最深の「深淵 Abgrund」と最高の「天 Himmel」とが共在するのである(S.255)。この「深淵」と「天」との絶対的無差別が「無底 Ungrund」であって、「深淵」即「無底」なのではない。シェリングは、この「深淵」と「天」、「闇」の原理と「光」の原理との調和的関係、すなわち闇の原理が光によって光被された統一的秩序を保持した関係が、我性によって逆転され、秩序の転倒が人間的自由の行使によってなされた時、悪が現実的に成り立つというのである。

しかし、このような悪がなぜ人間において現実的に成立するにいたるのか。この悪の現実性の説明において、シェリングは無底を「無差別」としてのみ捉える静的な視点を離れ、無底を「愛」として捉える動的な立場へと移行、というよりむしろ飛躍、してゆく。このような視点の飛躍が生じたのは、シェリングがその独自の神観を展開したとはいえ、ベーメと同様やはり本質的に人格的な愛の神を信仰する西洋キリスト教世界の一員であった、ということを如実に示している。シェリングは、無底の愛について語るとき、「…でありうるために」という目的論的文型を多用して、次のように記述している。根底が、無底の愛に背を向けて、反抗的な「独自の特殊な意志」とならなければならない理由は、やがて無底の愛がそれでもなおその根底を通して、光が闇を貫くように発現してくるとき、

「愛がその全能において現われんがため damit nun die Liebe--in ihrer Allmacht erscheine」である（S.267）。「これ（無底の愛の現われを指す--筆者）が存せんがために damit diese sey」、根底は独自性を、従ってまた対立を呼び起こさなければならないのである(ibid.)。根底の意志が我意を激発するのは、やがて神的精神が愛の意志として昇りくるとき、この精神がその内に自己を実現することができる「反抗者をこれ（神的精神を指す--筆者）が見出さんがため damit--dieser ein Widerstrebendes finde」である(S.267f.)。無底が分かたれるのは、「生きることと愛することが、人格的な実存があらんがため damit Leben und Lieben sei persönliche Existenz」である(S.300)。

右のような目的論的文型によって語られているのは、キリスト教の根幹をなす愛の神、苦悶する罪人をこそ赦し愛する人格的な愛の神の信仰内容である。シェリングによれば、神が根底のはたらきを許すのは、精神としての神、最も純なる愛としての神、生命ある人格としての神が現勢的に顕示してくるためにほかならない。人間が主体的に現実に犯す悪は、それを介して無底、無差別としての絶対者――そこには未だ人格性は存在しない（S.304）――が、精神としての人格神として自らを顕示せんがために、成り立たねばならないのである。なぜなら、人間における精神的で積極的な悪に対抗し、この悪から人間を救済しうるものは、それ自身やはり精神をもった人格神でなければならないからである。「人格的なもののみが人格的なものを癒すことができるnur Persönliches kann Persönliches heilen」のであり、「人間が再び神のもとに帰らんがためには damit der Mensch wieder zu Gott komme」神は人間とならねばならないからである(S.272)。

ベーメも神の愛について、シェリングと同様の目的論的文型を用いて、次のように記している。「一者は肯定としての純なる力と生命であり、神の真理あるいは神そのものである。これは否定がなければ、自己自身においては認識不可能であろうし、そこにはいかなる歓喜も高揚も感受性もないであろう。否定は肯定の、あるいは真理の対立物であるが、これは真理があきらかとなるためであり、そこに対立があって永遠の愛が活動的、感受的、意欲的となって愛することができる何らかのものがあらんがためである」（Theosophische Fragen S.6f.)。このような人格的な神の愛、神の歓喜と贖いとの対象として、人間のことが語られている基礎的データを次に再録しておく。「そしてこれ（人間）は、神が神の賛美と歓喜のために造った神の像であり、他の何ものでもない」［一三－1］。「--神は、神の本質の愛の中で、それ（人間の魂）を贖った、すなわち神の怒りが人間の生命の中で宥められた。そこで神の力が芳香

を放ち、火の中で人間の生命を再び永遠のことばの中に、すなわち神の中に引き入れた。…」[一三―2]。

ベーメが「神と呼ばれ、神である限りの神」と称し、シェリングが「実存する限りの存在者」として、「単に実存の根底である限りの存在者＝自然」と区別した神は、人格的な愛の神である。人間における悪の現実化と反逆性は、このような神の自己顕示のために不可避な一プロセスなのである。善悪の闘争の内でのみ、神は精神として、現勢的に現実的なものとして、自己を顕示するのであり(S.272)、罪に苦しむ者の魂の内でのみ、神の愛と贖罪は明らかに知られることができる、と考えられている。無底があらゆる生命の根源であり、しかもあらゆる生命は各々固有の運命をもち、苦悩や転化を蒙らざるをえないとすれば、無底から人格的な愛の神が生成してくるために、神と自然との分立が想定されたその端緒においてすでに、神自身も自発的に苦悩と転化に服した、と考えざるをえないであろう。「人間的に苦悩する神という概念 Begriff eines menschlich leidenden Gottes」なくしては、人間の歴史全体は不可解である、とシェリングはいう(S.295)。神はその絶対的な愛ゆえに、いわゆる善人よりはむしろ我性に苦しむ罪ある者を積極的に受容し、自己自身を悩める者と化す、というのである。このような神の絶対的愛について説きすすめてきたシェリングが「その全研究の最高点に den höchsten Punkt der ganzen Untersuchung」遭遇する箇所として挙げたのが、『自由論』の中で「無底」について詳論した部分であった(S.298f.)。

以上、ベーメの人間観を知るための基礎的データをまず提示し、それを他のベーメの諸著によって補い、これらとの関連でシェリングの『自由論』、神観、無底説について考察してきた。「J.ベーメは、彼が我々に記述する神の誕生でもって、近代哲学のあらゆる学問的体系に先行した」[17]というシェリング自身の言及が示すとおり、シェリングのベーメ評価および両者の密接な関連性はあまねく知られている。本稿は、シェリングの見解とベーメの見解との共通性に照明を当て、これによって明らかになる範囲内に限定し、且つ前稿で提示した基礎的データを論述の中に組み込んで、ベーメの人間観について考察したものである。

（了）

註

(1) 本稿は、前稿「ベーメの人間観―その基礎的データとシェリング（一）」（人文学論集第一四集所収）を受けている。前稿においては、コイレが『ヤコブ・ベーメの哲学』において採ったベーメ研究の方法に従って、ベーメの人間観を知るために必

要不可欠な基礎的資料を提示した。

(2) Alexandre Koyré, La Philosophie de Jacob Boehme, Paris, 1929, p.97.

なお、ベーメは一五七五年生まれで、一六世紀の最後の四半期も過ごしているが、彼の書き残した著作や書簡は全て一七世紀の最初の四半期に属しているので、この靴匠自身の記述を実証的資料として尊重したコイレは、ベーメを「一七世紀の人間」と述べたのである。

(3) Werner Elert, Die voluntarische Mystik Jacob Böhmes, Scientia Verlag Allen 1913, Neudruck 1973,S.8.

(4) W.Elert,op.cit.S.8.

(5) F.W.J.von Schelling, Philosophie der Offenbarung, Erstes und Zweites Buch 1858, Schellings Werke, Nach der Originalausgabe in neuer Anordnung hrsg.v.M. Schröter,6.Ergänz.Bd.S.123.

(6) このようにベーメの思想をシェリングの自由論との関連で考察するという方法は、かつて拙著『ベーメ倫理思想の研究』(松籟社) 第二部第一・二章において採ったものと変わらないが、本稿では、ベーメの人間観と共通するシェリングの見解をこの拙著から抽出して要旨をできるだけ簡潔に記し、これに前稿で提示したベーメの基礎的データを組み入れて、『自由論』執筆期のシェリングが如何に深くベーメに傾倒していたかをデータに基づいて示し、両者の人間観の共通性を明らかにしようと試みている。

(7) R.F.Brown, The Later Philosophy of Schelling, The Influence of Boehme on the Works of 1809−1815, London, Associated Univ. Pr. 1977, p.19.

ブラウンはこの研究書の中で、余りにも短かすぎるモノグラフだという批評を付してではあるが、ベーメとシェリングとの関係を考察した文献として、次のものを挙げている。Kurt Leese: Von Jakob Böhme zu Schelling, Eine Untersuchung zur Metaphysik des Gottesproblems (Erfurt, 1927)。ブラウン自身は、彼の研究書の第四章、Outline of the New Problem of Human Freedom (1809) の中で、「シェリングに与えたベーメのインパクト」について論じている(op.cit. p.118)。なお、ショウペンハウアーも指摘していたことであるが――シェリングの無底説がベーメの見解から採られたのは「こんにち明らかに十分知られている」(註13と同書・同頁)――、わが国の研究誌によっても、ベーメの無底の語は、彼の神智学の深い影響の下でシェリングの自由論の内に摂取された言葉の

一つであることは、「周知の如く」である、と記されている（哲学研究、第五百号、昭和四一年、一九頁）。

(8) Horst Fuhrmans, Zur Einführung, in: Schelling, Das Wesen der menschlichen Freiheit, Verlag L.Schwann, Düsseldorf S.XXXV.

(9) Paul Tillich, Preface in: John Joseph Stoudt, Sunrise to Eternity, A Study in Jacob Boehme's Life and Thought, Philadelphia 1957. p.7.

(10) F.W.J.von Schelling, Philosophische Untersuchungen uber das Wesen der menschlichen Freiheit und damit zusammenhängender Gegenstände, Schellings Werke hrsg.v.Schröter,4.Hauptband, S.261. なお、今後この書からの引用頁は、全て本文中に挿入する。

(11) S.Žižek, Selfhood as such is spirit, F.W.J.von Schelling on the Origins of Evil,in: Radical Evil, ed. by J. Copjec,Verso,1996, p.14.

(12) J.Böhme, Der Weg zu Christo, S.102, in: Sämtliche Schriften,Bd.4, Ausgabe von 1730 in elf Bänden neu hrsg. von Will-Erich Peuckert, Frommans Verlag, Stuttgart (1955-1961).

すでに本文中に記したとおり、ベーメの著述からの引用は全て、この全集版によるが、今後『キリストへの道』からの引用は略号としてWzCを用い、本文中に記入する。

(13) シェリングがベーメから採ったこのUngrundの語は、ショウペンハウアーの指摘によれば、語源的出所をギリシャ語のβυθοsにまで遡ることができる、といわれる。更に、ショウペンハウアーは、この語をabyssusと等置している。（A. Schopenhauer, Sämtliche Werke, 1. B.hrsg.v.A.Hübscher, 3.Aufl.Brockhaus, 1972.S.16.）しかしabyssusに相応するベーメの用語はAbgrund（深淵）の方であって、Ungrund（無底）ではない。従って、筆者には、このような語源的詮索は、今の場合あまり意味があるとは思われない。問題は、一つの単語が使用される文章中でのコンテクスト全体との関連において、その語の意味を捉えることが重要だと思う。

(14) Gertrud Bruneder, Das Wesen der menschlichen Freiheit bei Schelling und ideengeschichtlicher Zusammenhang mit Jakob Böhmes Lehre von Ungrund in : Archiv für Philosophie 8/1, 2, Juni 1958、S.103f.参照。

(15) John Schulitz, Jakob Böhme und der Kabbalah, Peter Lang, 1993、S.115.

カバラの「両性具有的アダム・カドモン」については、前掲の John Joseph Stoudt の研究書 Sunrise to Eternity, A Study in Jacob Boehme's Life and Thought, Philadelphia, 1957, p.96. にも見られる。

(16) この箇所は、Peuckert の新編版と Schiebler 版との間に若干の相違がある。ここでは後者による。

(17) Schelling, Philosophie der Offenbarung, op.cit.S.123.

(ふくしま　まさひこ・西洋倫理学教授)